



豊田中だより

令和7年9月19日(金)

9月号

横浜市立豊田中学校

〒244-0815 横浜市戸塚区下倉田町950番地 ☎ 045-864-8640

『普通の生活』とは

校長 鈴木 秀彦

夏休みが終わり、8月27日から学校が始まりました。「今年は例年になく暑い日が続き…」という言葉がニュースで聞きますが、去年も同じことを言っていた気がします。熱中症警戒アラートが発令される中で、今年も工夫しながら、生徒や先生方はいろいろな教育活動に取り組んでいました。長い猛暑はいずれ普通になってしまうのかと考えると、夏場の活動はどうなっていくのか心配になってしまいます。

そんな暑い日々の中、部活動等では多くの生徒たちの頑張りが目立ちました。3年生にとっては最後の大会や発表となり、良い結果を残すことができたり、結果は出なかったけどやり切った思い出が残った人も多かったのではないのでしょうか。ここまでの頑張りは必ずこれからの学校生活での自分の自信につながりますので、これからも色々な活動にチャレンジしてもらいたいと思っています。

学校では、教育相談を6日間行い生徒一人ひとりに夏休み中の出来事や生活面等について、先生たちが話を聞きました。中には「部活を頑張った」や「普通です」とか「特に何もありません」などと思春期特有の受け答えが今年も展開された人もいたことでしょう。

先生たちにとってどんな形であれ、生徒みんながいつもと変わらず青い空の下、グラウンドで遊ぶ姿や教室で楽しそうに会話している様子を見ているだけで、何か『ほっ』としてしまいます。学校に吹く風はまだ暑いですが、その風に乗って花や緑の香りが運ばれてきた校舎には平和な風景が広がっている気がしました。

しかし、世界に目を向けるとそのような平和な風景ばかりではないようです。この夏も世界各地で未だ続いている戦争のニュースを目にしました。一時期よりニュースで取り上げられる数は減ったようですが、続いていることは確かです。以前、戦禍の中で生活している一人の女の子の様子を取り上げた文章を目にしました。以下、一部抜粋です。

日本から遠く離れた遠い国、戦争によって日常が奪われてしまった子どもたちの一人にサニアさん(仮称)という女の子がいます。国連が運営する学校で避難生活を送っています。

ロケット弾が怖くて夜も眠れず、数分おきにトイレに行く彼女。バスルームの水が出ないため、何日もお風呂に入れず湿疹ができてしまった彼女。それでも学校の中庭が彼女にとって唯一、心が休まる場所になっているといいます。

彼女にとって友だちと一緒に学校で生活してきた楽しい思い出が、きっと心休まる場所の理由かもしれません。『普通の生活』ということ深く考えさせられました。彼女が普通の学校生活を送りたいと訴えても、学校の中庭の上に見える空から降り注ぐものはロケット弾かもしれません。彼女の頬に伝わるのは爆弾の爆風で、彼女の鼻をつくのは火薬の匂いかもしれません。そう考えると、普段子どもたちが手にしている平和がどれだけ尊いものか。

当たり前のように、みんなが学校で生活すること、勉強できること、会話を楽しむこと、そして、その風景を守っていくことがどれほど貴重なことか、『普通の生活』があることについて大切にしてこれからの学校生活も頑張っていきましょう。

横浜子ども会議

8月29日（金）に戸塚区役所にて「戸塚区横浜子ども会議」が行われ、2年生徒会本部役員2名が参加をしました。今年度の全体テーマは「いじめをしない自分であるために～つながる、広げる、いじめの未然防止の輪～」です。このテーマに向けて、夏休み前に豊田中学校ブロック（豊田中、豊田小、倉田小）の生徒会・児童会のメンバーで協議を行い、当日は各校の取組を豊田中学校ブロックとして発表しました。また、他の中学校ブロックの発表を聞き、いじめ未然防止のために自分たちにできることについても考えを深めました。

<参加生徒の感想>

様々な学校の発表を聞いていると感心する取り組みが多く、豊田中学校の取り組みにも活かしていきたいと思いました。また、この会議を通して特に感じたことは、自分が軽いと思って発した言葉でも相手にとってはすごく傷つく言葉になってしまうことです。そして、相手の気持ちを考えて話したり、行動したりすることがいじめをなくす第一歩になるのだということです。一人一人が自分の発している言葉を見直して、しっかりと相手の気持ちを考えて行動をしていけるといいと思います。

避難訓練

9月1日（月）に避難訓練を行いました。今回は保健美化委員の生徒に協力してもらい、意識づけの動画を作成し、昼食時に動画をみてから6校時に行いました。傷病者が出た場合を想定した訓練も同時に行いました。また戸塚消防署の方に来ていただきお話をさせていただきました。

生徒は速やかに集合でき、集中して話を聞いていました。また、傷病者の救護について生徒・職員が共通理解を図るきっかけになりました。



